

遊びの3原則

- 1 与えてはいけないものはないけれど、必ず「遊び」が目的であること。
- 2 知育、効果を意識しない!
- 3 親も一緒に楽しむ遊びは最高!



遊びで身につく力

「口を出さずに遊ばせておく」と言われても……と、どこか不安が残ることでしょう。でも、「力学的、科学的な遊びを体験しておく、学校で習ったときに肌感覚で理解できる術が作られる」「没頭している遊びの中で算数脳が育まれる」と聞けば安心しませんか? 遊びの中でどんな力をつけているのかを理解して見守ってください!

かくれんぼ

かくれんぼをしたときに「昨日Aくんは、こっこの木の陰に隠れてすぐに見つかっちゃったから、今日はあっちの神社の裏にいるんじゃない?」と予想する。そうやって、3次元空間に自分を置いて、物事を捉えたり裏側を想像したりする体験が自然にできる遊びなんです。これは、人の気もちや、目に見えないものを想像する力にもつながっていくんです。

木登り

どのような距離感で手と足を運んでいけば、上まで登ることができるのか(降りられるのか)考え、想像しながらする木登りは、頭と体を使い「危険な状況から強い集中状態も体感できる遊びです。

親が「今度は右手をその枝に……なんてやたらと指示を出してはいけません。意欲を持った、自由な木登りをさせてください。」

釣り

川釣りは、親子で楽しむ遊びとしておすすめします! 釣り針に工夫をして、糸を結び、えさをつける。この季節、この時間ならこの辺に魚がいそうだと生態を予測。その場所を目指して軌道を考えながら釣り糸を投げ、魚がかれば竿がしなって引っ張り合う。釣った魚を調理すれば観察だってできちゃう! 実に豊かな体験ができる遊びです。



料理

カレーやクッキー作りは幼児でも楽しめますよね! 危険が伴う包丁や道具を使うことは、とても集中力が必要です。ニンジンや棒状にしたクッキー生地を、いろいろな形に切ったり、型抜きをしたりすると立体認識も養えます!

積み木

オーソドックスですが、とてもすばらしい遊びです。積み木をいろいろな物に見立てたり、ひたすら高く積み上げたり、立体的(空間を作って)に積み上げたりと、遊び方に工夫や成長があらわれます。

見えないものが見えるように! 3次元、空間、立体、俯瞰のイメージを養う遊び。

お手伝い

「工夫する」ということを、言葉で教えるのって難しいですね。工夫は経験でしか身につけることができません。例えば子どもをお風呂掃除係にすると、毎日続けていく中で、効率よくキレイにするためには洗剤の量はこれくらいでスポンジの使い方は……と、気づき、工夫するようになります。そしてお母さんに「キレイ!ありがとう」と感謝されることで、ぐんと成長もします。

親の言葉の厳密性は最重要! 「後伸びする子」と「後伸びしない子」の差は、「家庭の言葉文化の豊かさ」で決まります!

幼児期は特に、正しい言葉づかいで!

こういうときは「うれしいじゃなくて、「楽しい」だよ!」と、言葉の使い方を直したり、

「宿題はやった? わからないところはなかった?」「うん、終わったよ! ひとつわからないことがあったけれど、調べたらぼっち、わかったよ」

という会話ができる家庭はすばらしいです。「後伸びしない子」を育ててしまっている家では、

「宿題はやったの?」「てか、ハラ減った?」「ママ、買い物に行かなくちゃ」

なんて、ちくちく会話が続いていきます。お互いが言い合いをすることで生活が流れてしまっているんですね……。

高濱正伸の毎日子育てガッツポーズ



PROFILE
花まる学習会 代表
高濱正伸先生

東京大学農学部卒、同大学院農学系研究科修士課程修了、1993年に「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した、小学校低学年向けの学習塾「花まる学習会」を設立。父母向けの講演会には、年間3万人が参加。「情熱大陸」など数々のメディア番組でも取り上げられ話題に。「小学生に育てたい算数脳」「わが子を「メシが食べる大人」に育てる」と著書も多数。



第2回「すべては遊びから学ぶ」

子育ての最終的な目的はひとつ。わが子を経済的、社会的、精神的に自立し「自分でメシを食べていける大人」にすること。そのためには何をすればいいの? なんて、悩まなくても大丈夫です。楽しんで実践できるポイントをお話ししますので、子育てのヒントにしてください!

発達ヒント
1 遊びから学ぶ
大人に育てる!
メシが食べる

親ならだれでも、わが子を「賢い子」に育てたいと願いますよね。でもそれはどんな風に賢いことをイメージしますか? 今の子どもたちが大人になる20年、30年後はどのような世の中になっているのでしょうか? 今回のコロナ禍のように、社会の環境が劇的に変化するときが次々と起こるかもしれません。そんな社会の変化にも対応して、力強く生き抜き、メシが食べていけるような力を身につけた「真に賢い」大人になってほしいと思いませんか? 私の塾の目標もそこです。「メシが食べる」というのは本当に大切なことなんです。

発達ヒント
2 「見える力」を身につける。

学校で習ったことをきちんと覚えてテストで発揮する「知識の再現」は、コソコソと机の上の「作業」を続ければ一定の成果が出ます。だから、幼稚園時代に「かけ算ができる」「小学校高学年で習う漢字が書ける」ようにする必要はありません。私は、そういう子が中学入試では思うような結果が出ない……という例をたくさん見てきました。むしろ幼児期に必要なのは、小学校に上がるまで、その「コソコソ」の小作業ができる集中力、話を聞き、自分の思いや考えを言葉で伝えることができる力、「育てておく」ことです。そして、その後ぐんぐんと伸びる子と、「作業」を続けるだけの子との差は「見える力」・「自分で決める力」・「詰める力」を持つかどうかで決まっています。

発達ヒント
3 「没頭」体験が子どもを伸ばす

遊びの中で心を奪われ、没頭する体験が地頭の成長に大きくかわります。大げさに言えば、子どもは野に放たばいいんです。そうすると、自然にやりたがることを見つけて何か遊び始めます。葉っぱや石、虫の抜け殻などを集めてポケットに入れたり、砂場で砂と山を作ったりと、それだけで楽しいの……

発達ヒント
4 子どもと共感して味わう。

子どもは、常に自分の「没頭」できるものを探して、発見を楽しみ、興味津々に生きています。あつ、あつ、あつという指差しから始まり「これ何?」「何で?」「子どもの「ん?」という「気づき」は生後まもなくからスタートしています。親は「ん?」に関心を持ち、感心してあげることが大切。だんだんと一言では答えられないことも増えてきます。「地球はどうして回っているの?」なんて……。そんなときは「すごいことに興味を持ったね!一緒に調べてみようか?」と聞いてみます。

また、こういったQ&Aを言語化してやり取りすることも、とても大切です。「国語感」を伸ばすにも、ここがポイントになります。散歩中に、木の葉を手にとり、「匂い」「質感」を言葉にして四季を共感するなんて、すてきですね!